

鷹書

			二	和
			三	書
			四	門
		五		
二	三	一		
冊	架	函	號	類

364

庫	文	閣	內	
五	三			和
四	四			書
一	五			
八	二			
架	冊	號	類	

內閣文庫	
番號	和 23451
冊數	2 (1)
函號	154 364

共上冊

20



夫雁鳥使元來不知而此道推安事尤口恪敷事也

雁鳥為道公民共執來夏禮儀法度計心得根

本之儀人母不知先釋迦如來提婆安寂初八雁鳥

鳩也八千度今大覺世尊也然四十八雁鳥云事世

常觸口不知子細故如何云七羽都崎十四母衣二

九十八尾十二毛已上四十八也此四十八則弥陀四十八願

也七羽七曜猫母衣九曜準身倚七羽表

七難則滅都崎之七羽表七福則生十二尾

十二天ニ定ム又十二因縁トス稀ニ有十三尾表潤月
四毛ハ多門持國增長廣目四忝力ハ金剛力ヲ
以増ス我ニ大ノ提鳥ヲ有情佛界ニ遠鳥ヲ爲引
入佛道爲結縁博生ヲ令歸攬也八幡大菩薩又
人間之不軍ニ勝軍勝度ト思惡心ヲ心終令勝
發心ヲ以成善心ト御折言也然ニ八幡御本地弥陀
如來也八幡之靈鳥鷹也提ト鷹ノ鳥ヲ勝人
之軍ニ何モ煩惱則菩提善惡不二邪正一如也

如何云ニ空也守護之鷹鳥天ハ毘沙門天也惜五
穀与卫衆生ニ噉五穀ヲ提鳥ヲ事悦給心也本朝
鷹鳥之守護神ハ諏訪明神也八幡ト御同意也
文ニ曰業盡有情雖放不生故宿人中同證佛
果此文ヲ毎日唱ハ鳥モ成佛シ鷹師モ現世安
穩富貴自在而來世ハ放折言之舩指竿ヲ本
覺無爲之都轉生ヲ事無疑但シ不守此儀ヲ
心終使鷹者ハ家ニ有災難子孫爲短命

来世必可落畜生界又鷹之鳥屋籠之
事卯月八日鳥屋籠七月十六日夜聖灵
之箸ヲ爲續松出鳥屋ヲ也箸鷹鳥以此故也
鷹正ハ身之依成弥陀聖靈之箸ヲ供養
佛ニ爲淳一劫也依之深ノ信可仰者也

- 第一 架同はる此如此事
- 第二 主也とて此事
- 第三 二法ちの緒乃事
- 第四 鞭餌袋沃一度に渡り事
- 第五 鷹つたきやう此事
- 第六 法名渡り此事
- 第七 川一緒乃事
- 第八 急ぬく後又鳥は此事

第九 山緒の事

第十 田緒の事

第十一 鶉雲雀鳴く事

第十二 鳥さふにかり事

第十三 尾の名目尾の事

第十四 鷹毛石の事

第十五 鷹にの尻尻りし事

第十六 台せし事同鳴乃七六事

第十七 焼串れす法の事

第十八 鷹頭乃事

第十九 ことらう事

第一

一 架さすサ字人ノ寸部分かめ記同極本扱とき

式寸ニ分かめき極分外にさへ 外字分

熱ノ長サ七尺八寸分甚なれサ寸六分

廣サ七寸六分下面の表方なしれうとさ

へ——長サ二尺八寸五分かろき此柱は加子
窓の柱に一つはく打る——横木ハ巻れ
写志そとじと基小指をむ海あり他木
な海へ——

一架れ長サを丈を尺六寸法かうのむ柱
ちんつほ八回葉母存るハ木末見雁鳥ハ末
木に繫る——回葉ちんつは黄葉と
末木に繫る——架木ハ橋用也——

一架布柱の間をちんつかへし上六竹に然い
くみ布れちんつと裏に打たへ——楕円と
あ——ちんつする——然いあるは六竹をせぬ
いふ——て武と紙口ははく絶る——まその
か——と一寸五分絶る——て菊とちんつ教へ
む——ひちちと上ハ短く下ハ長——ちん
長サ八分上ちんつは際ハふちけむすむを
屋——布ハ淡黄柿染あり紋と付は

虎豹法へ——虎ハ本末此が架布此
間を寸八分なり

一 架布のあも次身藁海あも

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

一 結架ハ定法あり——高に作り可法折也たい

一 六き——はあれ寸法とあはれ——かあまを

一 櫃より面に結へ——櫃の功かあまの上

一 回むきとひ免おのそにのれあ——結と

一 ときあつといよ二を急てむらぬあ——

一 下れ結成櫃より外小すあ——上れ繩を

一 内にあはれへ——何も二を海とんあ——

一 去架と云ハ危に如常指架ふ——下れ

一 横木ハなくして去へき一入きと極架等
 一 四本ハ架のことと去ハ杵及ハ指檀秋ハ楓
 冬ハ松ハ木と極ならと懸ち凡座よ可
 用客来貴統る時に此のあり
 一 二本の架と去ハか木ハ杵木ハ松木ハ
 竹也極言ハ架あり
 一 懸垂架の事ハ斬急よむいの木に近く
 一 可墨

楓 松
 柳 檜 杉

一 軍陳ふて座ハ架結事一敵此方へ向て
 可結杵より裏又冠木と極ハ繩結一
 急結座一 架木も敵の方へ向てはる
 次ハ一 奪ハあなたへ可繫
 一 母奪の鳥屋他更横五人守奥六人
 守寸さサ六人

一 神社奉幣之ため鷹鳥を志す時架木
一 結事一あは架木と社れたの方小冠木と
社の方へかひたへ 結事一ハ常事架木
の鳥籠も同様

第二

一 天物乃とむり切ハ意鷹に用
一 魚い——え物柑鷹ヨリ用
一 さらかひハ一魚ハもやく儀なり

第三

一 小槌結乃長サ母鷹ハ守武分
一 兄鷹ハ武寸八分
一 鷄ハ 武寸二分
一 化粧草此子
一 母鷹鳥ハ守武分
一 兄鷹鳥ハ守武分
一 鷄鳥ハ 守武分何者鷹と銀形切ら儀なり

第四

一 鞭餌袋沃一度後以事鞭に沃と付
 一 是為此頭の緒へ鞭と入口沃太へ可く為
 一 りとかけ急て後よとちり法取人あのみ成
 一 尻に分て形を鞭によと分へ
 一 餌袋と架ふうけを並に本成魚
 一 鞭沃とむよとむ分て餌袋此等の緒に
 一 と沃しと鞭と面にしとかけへ一 鷹

式つりは架れ鷹乃上程系屋うふ
 志つて先之餌袋此口を印へむむく屋

第五

一 鷹ハ北向に程系事 中式なり
 一 母鷹ハ七くさると兄鷹ハ五くさると鶴ハ
 一 之くさると也くさるとやう 且上り傳
 一 神社奉敬市此きよめに鷹鳥を寺内時程系
 一 常代鷹行念れためよ系社して程系

事一あはは小鷹鳥殺系ふさへ——鷓小
男鷹ふさへ結ぶう——又殺系屋——
一去人れ鷹鳥と我う奪うと一か葉に殺系う
う——は貴人れたう本末又殺系ううう
我う鷹鳥ハ小鷹鳥殺系にさへ——又小鷹鳥な
らへ我う奪うハ殺系なか——にさへ我
一宿山、遠敷此間ハ常乃殺系て家ハ海象
魚此時むじとひさう——又殺系へ——是を

んてせいんハ名の海象魚此用急は
なり

一鳥屋か——又意鷹鳥れいまこらとがぬ
い前ハ後とさうりさか葉に殺系て後さハ
條ハ殺系格うと七らさうと一節ハ必帯
一さう——ハ本末、おかけおく魚——
一諸名人もん得——おかけてさう——
節とと先執て決れ緒とさうと一節と

と記してまゝにゆく處に口傳

一馬太刀彎腰時架木に投糸渡すの時は
くまりの先を常として本末此方又
二まははりて受まを記投糸振るは
茶渡す事

第七

一鷹法を渡す事一妻に鷹と徒
鞭法をさくみせよむらのある様事

なすは身寄りに鞭一つとさ記一つ尾
此内より一つあを渡す一つ此むらも是也
一指の礼ゆひにのりし御袋打緒と記え
口にゆひヲ入る緒と引か一結と一まけ
しそ大指口に入まらうそりそ高次と
一六八常脱法五人あはらふそ志記此方
と抱て大指と口に入る腰に分處一
武青と鷹と渡す之青に鞭口傳

第七

- 一あしは長サ 母鷹ハ 九寸五分
- 一兄鷹ハ 七寸五分
- 一鶴ハ 六寸五分

第八

一餌袋に鳥さしは事 山緒越執る尾と
 おしは七寸五分 毛人此身よは
 ぬやうふさくは是ハ山緒一鳥は

やうか利ハ残一鳥とハく巨勢は
 外に疵をを云くうせらうりふ余
 のおよは残るは山緒を食うるは
 人よ鷹とわよふ毛餌袋ふ丸毛と
 さしはあしハ本式也不然は鳥乃
 けふも羽はありともたなくハ
 小鳥よそ可入母鷹のちも小鷹よは
 小鳥と用也

一雌ハ友とりりそ鳥へ一守武分並て
ち飾り武のぬせなる也

一軍陳へを名乃山緒刀目返金かすん
一刀可切りけやうは飾のこく

一内裏糸鳥れけやう山緒目あや

一公家公方へ糸鳥れ山緒緒目こりあり

一糸糸ハつ飾のこく

一山緒糸といへとも諸家持く不可有

一田緒糸也藤の目とて家より糸よよる
糸一

第十

一鴨れ田緒緒糸とて頭きこくと一糸海に

一雄ハ真結にみす武分並武飾とて

一尾へはと一結してち余らうのぬ

一糸不可切也

一雌ハ女結よ一守武分並て武飾と

一 口に丸太へまきし 一 結其余分より
つみせよ切角

一 黒鴨と赤れ末より 一 増えよし
急なるよし 一 結といふ寸法を
まかりと回す

一 小鴨の田端雄雌なり 一 守武分急上
れ余分武つみせにきり角

一 五位小鴨の田端かけやう 一 以てハと真

結しよ寸武分武筋と丸へまき

一 結も余分よし 一 切角

一 赤鴨の田端頭際 一 寸はりし

一 結よ寸武分武筋と 一 つよ丸

丸へまきし 一 結も余分寸に 一 文章

小切角

一 鷹の田端頭際と 一 寸まきし 一 結よ

一 寸武分武筋と 一 丸

志ろり結し——と糸を寸に「文字」
さる魚——

一 杉——鳥に因緒真鴨同前雄雌ともに

第十一

一 鷄をさむし事竹と割て挿へ——挿は
数十又六七つ——竿といふは二挿二をさみ
ふらさみと一竿といふは竹のぬ——
よと下すにちち——ちかくは竹の節の

をぬ——刺ぬへ——又鳥の上れ糸を

四寸と末と切事——鳥乃たの方より

一刀を抜くは右の方より一刀切ふ

とのよりうらとよまの——と——鳥

をうに紙より一筋はく武巻くふして

片脇ふ可結しなれとよにち

結目を中よ志て上下を寸ふ切な利

一 鷄をさむし事と糸をさむし事 日月は

一 五月之竹の目取うけて一日家魚一書六
上へ如松の葉ふたの山は魚一
一 鴨とさきと夏鶴は目取七七月のころ後
ろくろは竹に挟む柿の葉はたさみ
控ゆる材乃葉二と左右にぬふかけを
挟む又さうふに用家時を鴨はかきぬ
柿の葉ふとよと家ちつと但鴨とさきと
比乃事一冬春と不可用

第十二

一 鳥と棹にうけて余ふへもふ一さふ也
一 ぬハ雄ハ七ツ雌ハ五ツ魚一竹は
跡う記ふ新と四寸にさうと指魚一問
ぬこと名一はく魚程のけえ魚と
又さきとさきとよと物敷とさきとまふ
持包て海魚一はほよ廿七世七かけと
持スル

一鳥と竿ふりけに雄雌魚ハ雌と云々
魚雄と次々かけあらうひらうひよ魚く
が如年此切程ハ同前也

一雉鴨成度又小魚て墨小を春ハ雌
と先雄と後とにうるゑな利

一鷹ハ尾乃若 冷付 多助 鳴尾

一鳴羽 大石寺 小石寺

一十二尾の若と 志波尾といふ

一十四尾の若と 志まら尾といふ

第十四

一 鷹ノ羽乃若一の節より上ハ七羽ノ下モ次ハ
ほ後モ次ハ四モ

一 ひろくとハ鼻ノ毛ノ毛と云らん此とは
辻也

一 くらと云んハまひさしと云ふかんもんを
はたすの下の毛坤云さゆり毛志る一の
毛は背の毛と云う後この毛を辨乃毛とハ

羽ういれ上の毛は云々餌ううの毛と云々
むす乃毛なり

一 かつみらとはせ尻毛んの毛と云ハあうむと
皮れ毛と云ハあう毛れ毛乱糸とハ尾物
といふぬちちうぬれ毛とハ肉毛れ毛也
う後にかいこさめれぬ乃けあうと云
ぬさとはむられ毛との毛と云ハあう
とはひられう家毛成いふ長と名と云

一 母衣の毛と云羽飛毛と回事 後の
羽ういの合めれ羽也長と名と云と云
一 てうちらわうと云がーらの事也廣茂
名と云

一 いやうけんさひたうかーおー急れ毛同
るのう後かー野といふ
一 かけ爪 ねふしき うち法女 急るみ
一 そりがしき ちいと か急家 急るみ

- 一 けりりこら指れ名也長と音とに
- 一 くもてとは指の上はつふなり
- 一 巢鷹れ初ての毛生るとのり毛と云次ふ
- 一 村毛といふ次ふ尾花といぬなり
- 一 松原れ毛遠とれ毛回事之松鷹れ時
- 一 黄鷹れ毛のよきとれといふなり
- 一 鷗れ鳥屋の時黄鷹方毛つると餌け
- 一 せりふ

- 一 うらりと流ると云ハ羽と此の事也
- 一 長せんきけくくく回あて七羽の内二
- 一 羽と云
- 一 ぬくく毛と云脇れ長きけなり

第十五

- 一 鷹ふ斬んると云又朝日れ斬の下へ
- 指時分鷹鳥とよく斬れ下ふと鷹の目
- 見るとあ方の目れ内と眼おなり

たすとすれとハ此ふて雀或り之可斗
し餌とかいておきせて、何日に魚一
誘浴却とハ次日又鷹持らりし餌は
志ゆ〜ちりしに魚か〜と宿へゆて
餌他ゆ〜ら急雀或り之可斗り餌を
うらとみさ度は、上へ餌は飼魚
是を〜と急人か急は〜と〜と控れお毛
た〜と〜とハ鷹類と〜と持て可斗生也

第 十 六

一毛飼の事九と〜と〜と世は世ぬら
と云自然立鳥おとに人の事と何
らは羽下よると志餌と飼と考とぬき
てゑてたく伏し不難居れ事〜
一毛飼は鷹類余不へ世時ハ雀居て
をよと急やうハ頭伏む〜りの羽かひ
急入〜とすゆ〜と

一 小鷹鳥れをうなるくをせはたの内股の
根と下より上へかへせ起むまを胸と
又引きまをく

一 小鷹の大筋のころもうひをひき
越下より上へ皮引む起まかい度程
例て又引きまをく可也

一 毛飼といふ小鷹鳥れ事也

一 鳴乃くをせれ事

一 一妻にさつしたは下紫菊根尾の方飼
毎

二 妻ハ 下紫菊右のかさり

三 妻ハ 羽節此表尾の方なり

四 妻ハ 羽節此表右のなり

五 妻ハ 内股尾の方なり

六 妻ハ 内股尾の方なり

七 妻ハ 頭根尾の方なり

一 菟牝を母ハ尾の尾に去くと下をよへ
皮引む起て又引きこむを
一 去るとハハ尾の尾去くも下をよへ
む起て可胸を去くとせむおりれ
眼なり

第十七

一 雉子牝焼串ハ鳥一ツに五割可お上
一寸下八寸也ぬ一よると上の方乃皮割

一 魚一雄雌ともに同煎也

一 菟牝焼串ハ一ツに十割也ぬ一よると
上四寸下八寸上ノ皮をけはれおり

一 鷹牝を母串小さは多足と下へ一と
さ次魚一鶴乃鳥ハ足と上へ一とぬ
さよとぬ

第十八

一 母鷹小ても接よると集るも名とぬ

物よりのりせしきしと志をぬけすよ
いぬる所

一 下よりとしかつとありてはと昔も大なる
共に

一 先き一此鈴とハ鈴子とて言はれし言也

一 鷹鳥此をもちて飛をたしと云也

一 乞兒強く鳥とハさるる飼をる鳥哉

又いはく本とても今と辨たさといふ也

一 諸鳥乃其に分るるなき肝とていふけと

云く世に毛をもちのなると物といふ也

かゝる

一 羽羽赤へき鷹鳥と云ハけく愛と云ふ也

といふ大内此御将乃時ハ車ふて言を

存たまふ扱ふ此車の尾乃柱と云うやうに

と云ふといへり羽羽ハ此時

一 鷹目をとらみたるはと云ハ目乃又此とき

と云也

一らんかうさうはと云ハいつて此より尾湾
まをれ事といぬなりと

一らんかいらくしりさハかひよると羽さきたと也
一鷹れうほれと云ハ春の詞也秋は鈍餌
哉飼て鷹後白くちか海物之鳥居

志毛ともしよ

一常より鷹と云は海とあり哉と云也

指きとは一とく執と云也

一後より鷹をぬと云ハ新と海と云

一小櫃の端と云ハその端と云ふ也この端

たしよ

一大志はをたらひと云ハ志と云ハ

鷹の骨れ入はと云ハ鷹と云ハ

一鳥と云ふと云ておしと云ふといふ

新にあらと云と云といふなり

一 ちひらくよりふと云ハねくきぬかたのよき也
一 餌かき成餌とりけ餌にいらるといふ也
一 ちひらみ鷹とハ赤鷹也
一 小えが利と云ハ鳥と神へまゐる時鷹はくさ
一 指るとハ七の上ちいさ兒本又家かるとい
一 いたる地さしと家といふなり
一 大まかるといふとむじと家といふ
一 かくおとさしといふなり

一 居りくると云ハ鳥をたたくは厨と云
一 上れ也と云ハ時ハいふ魚うら次
一 小雁鳥乃小鳥と云ハぬしと家と云く
一 家と云

一 さひら鷹とハもららりりすの鷹と云也
一 志はふ急と云ハ鷹雀は使事 志はらかりた
一 いふなり

一 志はと云ハ小雁鳥の志が利母鷹乃

責子と云ふは同詞也小雁鳥小責子也
ゆめく云々魚うら次志つらむといふは
一毛羽と云ふは鶉よと云ふ小鳥ふても今を
惣と云ふ也生かるとは毛羽と云ふは
鷹よと云ふ也殺つるといふは利
一りらと云ふは小雀此鳥をばつらむ
一もらよと云ふは向鳥小つらむをらむ
一へと云ふは利もあそつらむといふは

小雀詞あるは母鷹よと云ふは
そつらむといふは

一魚緒尻うらと云ふは魚と云ふは魚と云ふは
事一

一魚緒尻うらと云ふは魚と云ふは魚と云ふは
一魚緒尻うらと云ふは魚と云ふは魚と云ふは
一魚緒尻うらと云ふは魚と云ふは魚と云ふは
一魚緒尻うらと云ふは魚と云ふは魚と云ふは

いふる利うせきなるなうく云屋か
一 次書詞よあうん
一 ぬらうり利しそふはとあうく入あ
一 う極事一なり

















